

2026年2月22日大齋節第一主日

創世記2章15—17節、3章1—7節
ローマの信徒への手紙5章12—19節
マタイによる福音書4章1—11節

本日は、大齋節第一主日です。大齋節は、イエス様の尊い十字架の死の意味を改めて覚えるために、様々な心の準備や学びをする期間です。その準備の一つとして、自らの罪を覚えることがあります。それゆえ、本日の聖書箇所は、罪そして罪への誘惑に関する物語が中心です。

旧約日課は、創世記の冒頭にある「禁断の果実」の物語です。主なる神様から「決して食べてはならない」と命じられていたにも関わらず、人間はそのたった一つの戒めも守れなかったのです。それは、主なる神様から与えられた人間の理性・自由意志が、間違った選択したということです。そのような人間に必要なのは判断の指針です。それが律法です。これは今でも有効なユダヤ教の教えです。

律法は見方を変えれば法律の一つです。一般的社会でも法律は大切です。整った社会、あるいは成長した社会とは、しっかりとした法律が整備され、また執行される社会といえるからです。しかし、その法律がいつも正しく作られ、また執行されるわけではありません。大きな事例に関するものであれ、小さな事例に関するものであれ、現実に即していない法律、あるいはザル法などと呼ばれるものもあります。それは、その法律を作り、また執行する人間に欠点があるからです。

それでは、主なる神様の与えた律法はどうでしょうか。その律法は、基となるのが主なる神様であり、目的は、主なる神様の正義と公正、愛と慈しみがこの世界に満ちるためです。簡単に言えば、律法は、本日の創世記の最初の状態に戻るために存在するのです。そして、律法は、主なる神様のへの信仰を基本的に前提としています。一般的な世界で造られまた執行されている法律とは目的、趣旨、そしてあり方が異なるのです。

そのような律法ですが、それを解釈し執行するのは人間です。律法があっても解釈次第で、正義と公正、愛と慈しみがなくしろにされる場合があります。また、「律法主義」という言葉もあるくらい、律法を守ることが、良い結果とならない場合があります。そのために主なる神様を信じるという前提があるのですが、その信仰のあり方自体が、人それぞれであるがゆえに、律法は完全であったとしても、執行面では困難さが多くあるのです。

そのような困難さに直面しながらも、誠実かつ懸命に律法を実行しようとしていた人の一人がパウロです。パウロは、主イエス・キリストを信じる教会の使徒となったのちも、律法を廃棄したわけではありません。本日の箇所の少し前、3章31節では、「**それでは、私たちは信仰によって、律法を無効にするのか。決してそうではない。むしろ、律法を確立するのです。**」と述べています。本日使徒書でパウロは、律法と死との関係について述べていますが、それは、どれほど律法を守っても、あるいは無視しても、人間には必ず死が訪れるからです。そして、その死という事柄が前提となると（アダムとエバは前提ではありませんでしたが）、人間に誤った選択をする、その事柄をどう解決

したらよいのか、それはパウロにとっても課題であったからです。

本日の箇所は、「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、すべての人に死が及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。」(ロマ5:12)とはじまります。「このようなわけ」とは、その前にある、イエス様による主なる神様と人間との和解の成立です。一人の人、アダム(エバもいましたが)によって入り込んだ死は、一人の人、イエス様によって贖われた、パウロはそこに主なる神様のご意思・ご計画を見出して、大転換をして、またその福音を宣教する使徒となったのでした。それは、「そこで、一人の過ちによってすべての人が罪に定められたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです」(ロマ5:18-19)とある通りです。

さて、パウロは、イエス様に関して、その十字架の死と、そこに正義と公正、愛と慈しみのすべてを示したことの証である復活、その一点からすべてのものの見方、すべての行動が自発的に変わると考えていました。そして、パウロは、イエス様に会ったことがない人でありながらも、そのような十字架のご受難を受け入れられたイエス様(パウロはキリストと称することが多いですが)に倣うことを大切にしました。キリストに倣うことがパウロにとって、律法を完成させる大切な事柄であったのです。ただし、パウロは、イエス様がどのように生きたのかは具体的に知りませんでした。また関心もなかったようです。言い方を変えれば、パウロは、教会という交わりにおいて、その教会自体がキリストの体として具体的に存在するがゆえに、『聖書(旧約と続編)』を基にして、理念的にキリストに倣うことが中心であり、それで充分であったのです。

そのようなパウロがいたからこそ、イエス様の福音は、世界に広がったといえるのですが、そのイエス様がどのような方であったのかという関心は、当然教会の中でも派生します。パウロにとってそれは二次的、あるいは十字架と復活以外必要のない事柄であったかもしれませんが、教会は福音書という形でそれを物語化し、イエス様の生き方を示しました。それはパウロが知らなかった事柄かもしれませんが、大切な事柄であることには相違ありません。本日の福音書は、その中でもイエス様が悪魔による誘惑を受ける場面です。イエス様は、空腹を満たすこと、神の子としての力を示すこと、富を手に入れることに関する誘惑を受けます。注目すべきは、その誘惑の内容と方法です。空腹を満たすことも、命を救うために力を発揮することも、そして繁栄も大事であり、善ともいえるからです。人間は善を行うそう思っているときにも間違いを犯すのです。善だと思ふ行為の方が、より大きな悪になるといえるかもしれません。そもそも、アダムとエバは、それが正しいと思ったから誤った選択をしたのでしょう。しかし、イエス様は、それらの巧妙な誘惑をしっかりと拒絶しました。わたしたちの生活で、いつでも誘惑があるわけではありません。しかし、いつ大きな誤りにつながる誘惑があるか、わかりません。だからこそ、大斎節の期間に自らを省み、自己と向き合い、より感謝をもってイエス様の十字架と復活の恵みを受け入れることができるように、準備の時を持ちたいと思います。